

真の割礼・真の洗礼

使徒パウロは、自ら選民と称し、神から律法が与えられていること、また契約の印としての割礼を与えられていることを誇り、自分たちは神との特別な関係に置かれているのであって異邦人とはまったく異なっている、とうぬぼれている当時のユダヤ人の誤った選民意識に対し次のように語り、彼等の宗教的偏見と傲慢を打ち砕く。

外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、肉に割礼を施された外見上の割礼が割礼ではありません。内面がユダヤ人である者こそユダヤ人であり、文字ではなく“霊”によって心に施された割礼こそ割礼なのです。その誉れは人からではなく、神から来るのです（2：28～29）。

形式は内容がともなわなければ意味がない。神の契約の言葉である「律法」も契約の恵みの印である「割礼」も、それを与えられた者がそれにふさわしく生きなければ、律法は単なる文字、割礼は単なる体のキズでしかない。

誤った選民意識の下で生きていたユダヤ人に対するこのパウロの言葉は、自分はキリスト者であると自称しながら、それとは裏腹の生活をしている今日のキリスト者に対する厳しい叱責の言葉でもあるように思われる。

私は～年も前に洗礼を受けています、どこそこの教会に属しています、献金もささげております、と言いながら、実際は礼拝も守らず、その生活に祈りもなく、聖なる神のみ前に立つ真の謙遜さもなく、この世の人々と同じく神の言葉にふさわしくない生活をしているとすれば、神の言葉である聖書を持っている、或いは洗礼を受けている、教会員であるということに何の意味があるか。何の意味もないばかりか、それは神への不真実であり、そのような独善的は誤った生活の故に「あなたたちのせいで、神の名は異邦人の中で汚されている」とパウロは言うのである（2：24）。なかなか厳しい言葉であるが、襟を正して聞くべき言葉である。

主イエスも、あの有名な「山上の説教」の中で、ご自分に従ってきた弟子たちに向って言われた。「わたしに向って『主よ、主よ』という者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行なう者だけが入るのである」と（マタイ 7：21）。

パウロにおいても、信仰とは、神の言葉の単なる知的認識ではなく、神への「従順」のことである（1：5、16：26 参照）。信仰がなければ神に喜ばれることは出来ないが（ヘブライ 11：6）、従順がなければ信仰は死んだものである（ヤコブ 2：26）という、神の僕たちの言葉を心に銘記したいと思う。

キリスト者であるということは、キリストに生きるということである。キリストに生きるとは、日々の生活の中で自我が十字架によって砕かれ、心の思いも新たにされて、真の謙遜さをもって、たえずキリストを「我が主」と仰いで従順に生きることである。自分の「自信」ではなく、キリストの「恵み」に信頼して生きることである。洗礼を受けているということは、神の前に義とされているのだから、もう安心していい、という手放しの義の承認ではなく、神の前に義であり続けるための継続的な問い掛けなのである。それは、たえず恵みに生きるようにとの私たちに対する神の呼びかけである。